



Red Hat CodeReady Containers 2.0

リリースノートおよび既知の問題

CodeReady Containers 2.0 の主な機能および特定された問題

Red Hat CodeReady Containers 2.0 リリースノートおよび既知の問題

CodeReady Containers 2.0 の主な機能および特定された問題

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2022 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Release_Notes_and_Known_Issues.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、CodeReady Containers 2.0 の新機能および改善された機能について記載し、簡単に説明します。また、ソフトウェアの使用中に発生する可能性のある問題に関する情報も含まれています。可能な場合は、特定された問題に対する回避策を説明します。

目次

多様性を受け入れるオープンソースの強化	3
パート I. リリースノート	4
第1章 コンポーネントのバージョン	5
第2章 最小システム要件	6
2.1. ハードウェア要件	6
2.1.1. OpenShift Container Platform の場合	6
2.1.2. Podman コンテナランタイムの場合	6
2.2. オペレーティングシステム要件	6
2.2.1. Microsoft Windows	6
2.2.2. macOS	6
2.2.3. Linux	7
第3章 変更点および改善点	8
3.1. 新機能	8
3.1.1. テクノロジープレビュー	8
3.2. 主な変更	8
パート II. 既知の問題	9
第4章 一般的な問題	10
4.1. OPENSIFT CONTAINER PLATFORM 4.7 クラスターの起動時間の増加	10
4.2. メトリクスはデフォルトで無効になる	10
4.3. 複数の OPERATOR を有効にするには、デフォルトよりも多くのメモリーが必要です。	10
4.4. 最初のネームサーバーが IPV6 の場合、CODEREADY CONTAINERSは機能しません。	10
第5章 MACOS の問題	11
5.1. ハイバネートにより、仮想マシンの時間が非同期に	11
第6章 MICROSOFT WINDOWS の問題	12
6.1. CRC SETUP コマンドは、MSI インストーラーを使用して以下のインストールを実行する必要があります。	12
6.2. CRC CLEANUP コマンドが、パーミッションエラーで失敗する可能性があります。	12
6.3. %WINDRIVE%外で実行した予期しない動作	12
6.4. CODEREADY CONTAINERS が POWERSHELL での FULLLANGUAGE サポートを想定	12
6.5. CRC OC-ENV コマンドは、%PATH%の特殊文字では機能しません。	12
関連情報	12

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#)をご覧ください。

パート I. リリースノート

本セクションでは、Red Hat CodeReady Containers 2.0 製品で最も重要な機能およびバグ修正について説明します。

第1章 コンポーネントのバージョン

CodeReady Containers 2.0 には、以下の主要コンポーネントが含まれています。

表1.1 CodeReady Containers: コンポーネントのバージョン

コンポーネント	Version
OpenShift Container Platform	4.10.3
OpenShift クライアントバイナリー(oc)	v4.10.3
Podman バイナリー	3.4.4

第2章 最小システム要件

CodeReady Containers の最小ハードウェアおよびオペレーティングシステムの要件は以下のとおりです。

2.1. ハードウェア要件

CodeReady Containersは、AMD64およびIntel 64プロセッサアーキテクチャでのみサポートされています。CodeReady Containersは、ARMベースのM1アーキテクチャをサポートしていません。CodeReady Containersは、ネストされた仮想化をサポートしていません。

必要なコンテナランタイムに応じて、CodeReady コンテナには以下のシステムリソースが必要です。

2.1.1. OpenShift Container Platform の場合

- 物理 CPU コア 4 個
- 空きメモリー 9 GB
- ストレージ領域の 35 GB



注記

OpenShift Container Platform クラスターでは、CodeReady コンテナインスタンスでこれらの最小リソースを実行する必要があります。ワークロードによってはより多くのリソースが必要になる場合があります。CodeReady コンテナインスタンスにより多くのリソースを割り当てるには、「インスタンスの [設定](#)」を参照してください。

2.1.2. Podman コンテナランタイムの場合

- 2つの物理 CPU コア
- 2 GB の空きメモリー
- ストレージ領域の 35 GB

2.2. オペレーティングシステム要件

CodeReady Containers には、サポートされるオペレーティングシステムの最小バージョンが必要です。

2.2.1. Microsoft Windows

- Microsoft Windows では、CodeReady Containers には Windows 10 Fall Creators Update (バージョン 1709)以降が必要です。CodeReady Containers は、Microsoft Windows の以前のバージョンでは動作しません。Microsoft Windows 10 Home Edition はサポートされません。

2.2.2. macOS

- macOS では、CodeReady Containers には macOS 10.14 Mojave 以降が必要です。CodeReady Containers は、macOS の以前のバージョンで動作しません。

2.2.3. Linux

- Linux では、CodeReady Containers は Red Hat Enterprise Linux/CentOS 7.5 以降（8.x バージョンを含む）および最新の 2 つの安定した Fedora リリースでのみサポートされます。
- Red Hat Enterprise Linux を使用する場合は、CodeReady Containers を実行するマシンが [Red Hat カスタマーポータルに登録されている](#) 必要があります。
- Ubuntu 18.04 LTS 以降および Debian 10 以降はサポートされておらず、ホストマシンの手動設定が必要になる場合があります。
- Linux ディストリビューションに [必要なパッケージをインストールするには](#)、「[必要なソフトウェア パッケージ](#)」を参照してください。

第3章 変更点および改善点

本セクションでは、CodeReady コンテナ 2.0 で導入された主な変更点の一部を説明します。

3.1. 新機能

- CodeReady コンテナは、開発およびテスト目的で、ローカルのラップトップまたはデスクトップコンピューターに、事前設定された OpenShift Container Platform 4 クラスターまたは Podman コンテナランタイムを最小限に抑えます。CodeReady Containersは、Linux、macOS、および Microsoft Windows 10 のネイティブハイパーバイザーをサポートする Red Hat Enterprise Linux 仮想マシンとして提供されます。
 - CodeReady コンテナは、OpenShift 4 クラスターまたは Podman コンテナランタイムでのローカル開発およびテスト用に設計されています。OpenShift 3 クラスターをローカルで実行するには、[Red Hat Container Development Kit](#) を参照してください。

3.1.1. テクノロジープレビュー

これらの機能のサポートは、[テクノロジープレビュー機能のサポート範囲](#)の対象となります。

- CodeReady Containers 2.0 には、`c bundle generate` コマンドを使用して、**現在実行中のクラスターに基づいてカスタムバンドル**を作成する機能が含まれます。このコマンド、パラメーター、および動作は、今後のリリースで互換性のない状態に変更される可能性があります。

3.2. 主な変更

- CodeReady コンテナはコンテナランタイムの Preset を提供するようになりました。これらの Preset により、OpenShift Container Platform クラスターまたは Podman コンテナランタイムを実行できます。コンテナランタイムの Preset の詳細は、「[Understanding Presets](#)」を [参照](#) してください。
- Microsoft Windows および macOS を実行しているホストについて、CodeReady Containers システムトレイ実行可能ファイルのグラフィカルユーザーインターフェース(GUI)が更新されました。この新しい GUI は、どちらのオペレーティングシステムでも統一されています。
- CodeReady コンテナは、Microsoft Windows および macOS で CodeReady Containers システムトレイの自動起動を有効または無効にする機能を提供します。この機能はデフォルトで有効にされており、システムトレイに GUI を使用して設定できます。
- CodeReady Containers 2.0 は、OpenShift Container Platform 4.10.3 を埋め込みバージョンとして提供します。

パート II. 既知の問題

本セクションでは、CodeReady Containers 2.0 のユーザーが発生する可能性のある問題と、これらの問題の回避策を説明します。

第4章 一般的な問題

すべてのサポート対象プラットフォームに影響する問題。

4.1. OPENSIFT CONTAINER PLATFORM 4.7 クラスターの起動時間の増加

アップストリームの問題により、CodeReady Containersに組み込まれているクラスターは、**crc start** コマンドの使用を開始するのに通常よりも時間がかかります。

問題についての詳細は、[BZ#1927263: kubelet service takes around 43 secs to start container when started from stopped state](#)を参照してください。

4.2. メトリクスはデフォルトで無効になる

CodeReady Containersが一般的なラップトップで実行されるようにするには、リソース負荷の高いサービスの一部がデフォルトで無効になります。これらのサービスの1つは、Prometheusと、関連するすべての監視、アラート、およびテレメトリー機能です。

これらの機能を有効にするには、デフォルトで使用する CodeReady Containers仮想マシンよりも多くのリソースが必要になります。



注記

これらの機能を有効にした後は、監視を無効にすることはできません。監視を再度無効にするには、**crc delete** で仮想マシンを削除し、**crc start** で新規の仮想マシンを再作成します。

『[Red Hat CodeReady Containers Getting Started Guide](#)』の「[Starting Monitoring, Alerting, and Telemetry](#)」を参照してモニタリングを有効にします。

4.3. 複数の OPERATOR を有効にするには、デフォルトよりも多くのメモリーが必要です。

crc start コマンドは、デフォルトで 9 GiB のメモリーを CodeReady Containersの仮想マシンに割り当てます。複数の Operator を有効にすると、メモリーの要件が増える可能性があります。

追加のメモリーを割り当てるには、『[Red Hat CodeReady Containers Getting Started Guide](#)』の「[Configuring the virtual machine](#)」を参照してください。

4.4. 最初のネームサーバーが IPV6 の場合、CODEReadY CONTAINERSは機能しません。

CodeReady Containers 仮想マシンの DNS 解決は、最初のネームサーバーが IPv6 の場合に中断する可能性があります。

この問題を回避するには、**-n** フラグを使用して CodeReady Containersの仮想マシンを起動する際に IPv4 ネームサーバーを指定します。

```
$ crc start -n 8.8.8.8
```

第5章 MACOS の問題

本セクションでは、macOS ホストのユーザーに影響する CodeReady Containersの問題を説明します。

5.1. ハイバネートにより、仮想マシンの時間が非同期に

CodeReady Containers 仮想マシンの時間がホストマシンの時間と非同期になる場合もあります。この問題は、ホストマシンがハイバネートに入る際に CodeReady Containers仮想マシンが実行している場合に発生します。この問題を解決するには、CodeReady Containers仮想マシンを停止し、再起動します。

```
$ crc stop  
$ crc start
```

第6章 MICROSOFT WINDOWS の問題

このセクションでは、Microsoft Windows ホストのユーザーに影響する CodeReady Containersの問題を説明します。

6.1. CRC SETUP コマンドは、MSI インストーラーを使用して以下のインストールを実行する必要があります。

MSI インストーラーで CodeReady Containersをインストールし、コンピューターを再起動してから、コマンドプロンプトまたは PowerShell で **crc setup** コマンドを実行してインストールを完了してください。

6.2. CRC CLEANUP コマンドが、パーミッションエラーで失敗する可能性があります。

コマンド間でホストマシンを再起動せずに **crc setup** を実行してから **crc cleanup** を起動すると、**crc cleanup** で以下のエラーが報告されます。

```
Post "http://unix/clean": open \\.\pipe\crc-admin-helper: Access is denied.
```

crc cleanup コマンドを完了するには、ホストマシンを再起動して、もう一度コマンドを実行します。

6.3. %WINDRIVE%外で実行した予期しない動作

Hyper-V ドライバーは、**crc** バイナリーをネットワークドライブから実行すると失敗します。**crc** バイナリーは、**%WINDRIVE%** の場所に配置する必要があります。**%WINDRIVE%** は通常 **C:** に設定されます。

6.4. CODEREADY CONTAINERS が POWERSHELL での FULLLANGUAGE サポートを想定

ConstrainedLanguage PowerShell モードは、システム管理者が決定する例外でサポートされています。

6.5. CRC OC-ENV コマンドは、%PATH%の特殊文字では機能しません。

Microsoft Windows では、PowerShell およびコマンドプロンプトが UTF-8 エンコーディングを使用しません。そのため、**%PATH%** にある特殊文字を使用して **crc oc-env** コマンドを実行すると、UTF-8 文字を正確にエンコードしません。この問題に対する既知の回避策はありません。

関連情報

- CodeReady コンテナの機能の概要および [OpenShift Container Platform](#) の使用についての概要は『[Red Hat CodeReady Containers Getting Started Guide](#)』を参照してください。
- CodeReady Containers の問題を報告し、Red Hat BugZilla の **crc** コンポーネントが使用された [OpenShift Container Platform](#) 製品を使用する新機能を要求します。

